

司書資格取得希望学生の意識調査と 司書課程教育プログラムの方向性

Future Directions of Librarian Training Course at Jumonji University through
a Study of Consciousness of the Students who wish to Librarian Certification

石川 敬史¹⁾
Takashi ISHIKAWA

近藤 秀二²⁾
Shuji KONDO

安達 一寿³⁾
Kazutoshi ADACHI

要 旨

十文字学園女子大学司書課程（以下、十文字司書課程とする）におけるビジョンの構築を視野に入れ、司書資格取得希望学生の動機や意欲、これまでの図書館利用経験等の特徴を明確にすることを目的に意識調査を実施し、先行研究であるLIPER調査や、山梨英和大学司書課程調査の分析の枠組みを用い比較検討をおこなった。その結果、学校図書館職員へやや強い印象を持ち、小学校・中学校・高等学校での読み聞かせの経験が高いものの、将来の職業との関連には消極的な姿勢がある等の特徴が明らかになった。さらに本調査を分析すると、高校生の頃に司書資格取得を考えた学生は、司書資格取得や将来の職業へ前向きな認識であったが、大学入学後に司書資格取得を考えた学生は、図書館への興味・関心よりも資格取

得が目的となり、将来の職業との関連性も消極的な傾向にあった。また、司書資格の取得と将来の職業との関連について、図書館で働きたいと考える学生は図書館の利用経験が高く、資格取得理由も肯定的であった。他方、資格取得が就職に有利になればよいという学生は、図書館利用経験が低く、資格取得理由も消極的であった。

これらの検討結果を踏まえ、女子大学としての十文字司書課程のビジョンと教育プログラムの再構築に向けた方向性を明らかにした。

1. はじめに

1.1 背景

大学で司書の資格を取得しても、正規職員の司書として図書館へ就職することは難しい。その背景のひとつには、図書館を設置している地方自治体や学校法人等が経費削減を目的とした経営改革

¹⁾十文字学園女子大学21世紀教育創生部

Division for Arts and Sciences, Jumonji University

²⁾十文字学園女子大学図書・情報センター

Center of Library and Information, Jumonji University

³⁾十文字学園女子大学人間生活学部メディアコミュニケーション学科

Department of Media Communication Studies, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：図書館情報学教育，図書館司書課程，意識調査，教育目標，キャリア教育

を強力に進められていることにある。その結果、PFIによる図書館の設置や、指定管理者の導入などによる図書館業務の外部委託化により、図書館における非正規職員が増加している。こうした状況にも関わらず、約250の大学・短期大学により約1万人以上の司書有資格者を社会へ送り出している^{*1)}。

国内における司書の養成については、現職者を対象とした司書講習の科目(単位)に相当するものとして運用されてきた点を改め、2008年に図書館法の改正が行なわれ、同法第5条第1項第1号に大学において履修すべき図書館に関する科目が文部科学省令で新たに定められることになった。同時に、2006年以降、図書館に関する科目の明確化に向けて、「これからの図書館の在り方検討協力者会議」が検討を重ね、「司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について(報告)」¹⁾が提出された。この報告には、①専門的な知識・技術を身につけていくための入り口として位置づけられること、②大学教育のための科目にふさわしく、体系的な基礎理論を確実に学ぶとともに、理論と現実を結びつけること、③公立図書館以外の就業の場や、図書館ボランティア等の図書館の良き利用者につながるなど、図書館に関する科目の基本的な考え方や体系的な教育科目が提起されている。これらを踏まえ、2011年に図書館法施行規則が改正され、司書資格取得に必要な最低科目・単位数は14科目20単位から13科目24単位へと変わった。

こうした改正により、司書資格は各大学の責任において付与されることになるため、各大学は特色を持った司書課程を運用し構築する必要がある。しかし、教育水準の評価は各大学、さらには司書課程担当者に限定されることが推測され、今後、社会の要請と教育目標との間にギャップが生じる恐れが指摘されている²⁾。

1.2 研究目的と本学の現状

本研究では、十文字司書課程の理念やビジョンの構築を視野に入れ、教育プログラムの再構築を目指すために、司書資格取得希望学生の意識調査を行ない、動機や意欲、これまでの図書館利用経験等の特徴を明らかにした。そして、十文字司書課程のビジョンと教育プログラムの再構築に向けた今後の方向性を明らかにした。

十文字司書課程では、図書館法施行規則の改正に伴い、2012年度入学生を対象に新たなカリキュラムを構築した。さらに、これまで十文字司書課程の履修は短大の文学系学科と大学の社会情報系学科に限定されていたが、2012年度より全学科(幼児・児童・心理・食物栄養・福祉)での履修が可能になった。カリキュラムの特徴は、少人数で学生と教員の距離が近いことである。2クラス以上ある科目は、図書館概論(2クラス)、情報サービス演習Ⅰ(3クラス)、情報サービス演習Ⅱ(4クラス)、情報資源組織演習(3クラス)、児童サービス論(2クラス)、図書館基礎特論(2クラス)、図書館サービス特論(2クラス)である。十文字司書課程の履修は1年生から可能で、毎年一学年約70名(うち短大生約30名、大学生約40名)の学生が履修し、司書資格を得て卒業している。

しかしながら、全科目が省令科目に沿った科目名であり、卒業要件外科目として開講している。さらに、授業の内容も本学の特色が描かれているとは言い難く、各学科との連携や学科の専門科目・共通科目との連続性が明確ではない。その背景として、十文字司書課程のありたい姿や目指すべき方向性(ビジョン)が明確ではないことがいえる。

すなわち、十文字司書課程の履修人数や近年の図書館を取り巻く就職状況を踏まえながら、司書資格の取得が女子学生ひとりひとりの人生やキャリア・パスの中で、どのような位置と意義を有するのかを考究しなければならない。同時に、学生の目線や学生が大学で成長し学び合うという文脈

で、十文字司書課程における教育目標を明確にする必要がある。

2. 先行研究

司書課程に関する研究には、(1) 授業・演習の実践報告、(2) 司書養成の在り方、(3) 司書課程の履修者の認識・意識に関するものがある³⁾。

これらのうち、(2)の司書養成の在り方として、例えば田窪直規(近畿大学)は、各大学司書課程における独自のコンセプトや特徴を打ち出し、豊かな教育実践の活性化の必要性を指摘している⁴⁾。川原亜希世(近畿大学)は、2000年から2005年までの近畿大学司書課程の履修者数と変化、ファイリング・デザイナーや情報検索基礎能力試験に対応したカリキュラム改革などを報告している⁵⁾。二村健(明星大学)⁶⁾、青柳英治(明治大学)⁷⁾、安形輝(亜細亜大学)⁸⁾なども、各大学の新しい司書課程への対応を報告している。

さらに、司書のキャリアパスを視野に入れた指摘もある。糸賀雅児(慶応義塾大学)は、司書課程における教育について、即戦力の司書資格の付与ではなく、司書のキャリアデザインの視点から設計し直し、教育理念や地域の実情に応じて「多様なキャリアパスのどの部分の教育を自分たちが担おうとするのか再検討すべし⁹⁾」と指摘している。糸賀が指摘しているように、司書に関して既に多くの協会が独自の認定資格制度を構築し、実際に運用されている^{*2)}。

このように、各大学の司書課程では、単に司書資格を付与することが目的ではなく、卒業後の学生のキャリアパスを踏まえ、司書課程でどのような学生を育成し、どのような力を習得するのかを明確にすることなど、各大学の理念に沿った司書課程の特色を打ち出していく必要がある。しかし、こうした議論の中に女子学生に対する司書養成の議論はみられない。

(3)の司書課程の履修者の認識・意識調査については、日本図書館情報学会が2004年度から開

始した「情報専門職の養成に向けた図書館情報学教育体制の再構築に関する調査研究」における図書館情報学教育班の意識調査(以下、LIPER調査とする)がある¹⁰⁾。さらに、LIPER調査を準用した山梨英和大学司書課程の調査(以下、英和調査とする)¹¹⁾、大妻女子大学司書課程履修者を対象とした履修理由と満足度の調査³⁾、司書資格取得者に対する卒業後の満足度調査¹²⁾、S大学における新入生の図書館利用経験の調査¹³⁾などがある。これらの調査によると、学生が司書資格を取得する理由として、「本が好き」、「図書館が好き」といった理由があげられる。他方で、図書館情報学を専攻する学科に所属している学生と司書課程を履修する学生や、大学によって回答結果に差がある設問もあった。さらに、これらの調査で女子学生に対する特有な点を詳細に分析しているものは少なく、LIPER調査や英和調査において女子学生は司書資格取得に積極的で意欲があるなど一部の報告がある。

また、京都大学の溝上慎一は、青年期の自己形成やアイデンティティ形成という観点からキャリア発達や社会的自立を促すために教育現場への示唆を提示している¹⁴⁾。その中で、①目の前の学生の何がキャリアなのか、何が社会的自立なのかを具体的に考えアンケート調査を行ない、実態を把握すること、②将来の見通しを把握しつつも、単なる頭の中だけの話になっていないかを確認する、③様々な学校行事を通して学生と他者との関係性構築を促すことをあげ、まずは学生への調査を実施し現状を把握する重要性を指摘している。

したがって司書課程履修者の認識・意識調査に関する今後の課題として、先の図書館法施行規則の改正を背景に、司書資格を取得した学生と司書資格を取得しなかった学生との違いを含めた学習アウトカムズの調査や、司書資格を取得し卒業した学生の意識や満足度調査の実施、さらには女子学生並びに女性司書に対するキャリア形成支援を踏まえた意識調査があげられる。

3. 調査の方法

全国規模の調査である LIPER 調査は、司書・司書教諭取得希望者の資格取得の動機や、これまでの図書館利用経験等を総体的に明らかにしている。そこで、本研究では、LIPER 調査で使用された質問紙を準用し、LIPER 調査結果との比較を通して、十文字司書課程における司書資格取得希望者の特徴を検討した*¹⁾。

さらに、同様に LIPER 調査を準用して比較分析の調査を実施している英和調査¹¹⁾、LIPER 調査結果のうち明治大学司書・司書教諭課程における調査結果報告（以下、明治調査とする）¹⁵⁾ も用い比較した。検討にあたり、英和調査の分析手法や作図方法を使用した。

調査は、2012年4月に十文字司書課程の必修科目である「図書館概論」（月曜1限・金曜5限：1年生から履修可）と「図書館サービス論」（土曜1限：2年生から履修可）の受講生を対象とした。調査に先立ち、授業で調査の趣旨を説明して実施・回収した。その結果、137名から調査票を回収できた（以下、本調査とする）。

4. 調査結果

4.1 回答者の属性

本調査の回答者の年齢は-19歳（86.9%）、20-29歳（11.7%）であり、LIPER 調査では-19歳（64.0%）、20-29歳（34.4%）であった。また、回答者の学年は表1の通り、本調査では、1年（47.4%）、2年（44.5%）、3年（8.0%）であり、LIPER 調査では、1年（49.4%）、2年（22.8%）、3年（16.6%）であった。

表1. 回答者の学年 (%)

	1年	2年	3年	4年	その他
本調査	47.5	44.5	8.0	0	0
LIPER	49.4	22.8	16.6	8.9	2.3
英和調査	0	44.2	39.4	11.5	4.9
明治調査	0	63.4	29.7	4.6	2.3

本調査では、1、2年生で回答者の約90%以上

を占めているが、LIPER 調査では約70%となっている。こうした相違の背景として、十文字司書課程では、①短大生が数多く履修していること、②大学生でも初年次から司書科目の履修が可能で、早い年次のうちに司書科目を履修する傾向にあることが考えられる。なお、英和調査、明治調査ともに、2年生から司書課程を履修するため、2年生以上の学生が回答している。

履修生の所属学部について本調査では、社会情報系学科（54.0%）、短大（31.3%）、幼児・児童・心理・福祉系学科（13.8%）であった。LIPER 調査においても文科系学部が圧倒的に多く、人文学部を含む文学部（49.7%）、短大文系（15.1%）、その他（19.7%）、教育学部（8.2%）であった。LIPER 調査の設問には、主に文学部（人文含む）、法学部、経済学部、教育学部、工学部等の伝統的な学部名があげられていたため、単純な比較は難しいが、本調査の回答者は社会科学系と短大の割合が高いことがわかる。

回答者のうち女子学生の割合について、本調査では100%であるが、LIPER 調査（79.6%）、英和調査（80.8%）、明治調査（62.3%）であり、女子学生の割合が高いことがわかる。

4.2 調査結果の詳細

LIPER 調査との比較については、英和調査と同様の枠組みを使用した。すなわち、LIPER 調査の集計結果では、一部の設問に限定して、①司書希望、司書教諭希望、②教育プログラム（専門学部学科の専攻、学科の一部、資格課程）別に集計している。さらに男女別の集計も一部の設問に限定されている。十文字司書課程は女子大学における司書資格課程であり、LIPER 調査結果に記載の司書希望、資格課程の集計、そして女子学生の回答を比較するのが望ましいが^{s*3)}、集計結果が全て公開されていないため、設問に応じて LIPER 調査の全体の集計結果や男女比を用いて分析する。また、各設問の回答結果については、

上位の回答や比較検討できる設問を表やグラフ*4)で掲載した。

(1) 資格取得への意欲

司書資格取得への意欲について、「他の科目の履修を犠牲にしても資格に関する科目を履修する」と回答した者は57.7%であった。LIPER 調査における同様の回答は52.1%（女子学生の割合は53.6%）であり、うち資格課程の学生では46.7%であった。他方で、「時間割の都合で資格に関する科目の履修が困難な場合には、資格取得をあきらめる」が28.5%であったが、LIPER 調査では42.6%であった。本調査では、1-2年生が多いこともあり、司書資格取得への高い意欲がうかがえる。

(2) 資格取得の理由

司書資格取得の理由として、上位の3項目は表2の通りである。さらに英和調査では男女の比較を行っており、男子学生は「図書館が好きだから」(26.7%, 女子学生8.9%)が最も高い一方で、女子学生は「図書館で働きたい」(29.1%, 男子学生6.7%), 「何か資格を得たい」(25.3%, 男子学生13.3%)であった。英和調査, LIPER 調査(資格課程)等と比較すると、本調査では「図書館で働きたい」という積極的な理由が低い傾向にあった。

なお数値は少ないが「親や高校時代の先生に勧められたから」について、本調査では6.6%, LIPER 調査では4.7%であり、やや高いことがわかる。さらに本調査において、自由回答欄に「本が好きだから」と回答する割合が約3%存在した。

表2. 司書資格取得の理由 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
図書館で働きたい	16.1	22.4	25.5	29.0
何か資格を得たい	25.5	25.4	23.4	16.6
図書館が好き	24.8	20.1	22.3	22.5

(3) 資格取得を考えた時期

表3によると LIPER 調査(資格課程)や英和

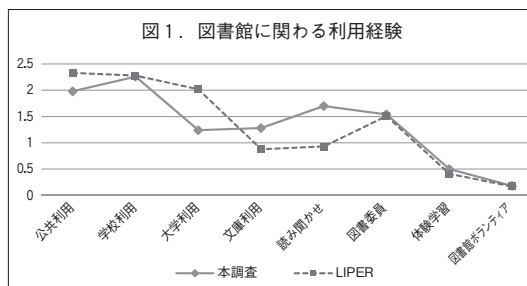
調査等と比較して「高校生の頃」の割合が最も高く、「大学入学後」の割合は、やや低いことがわかる。

表3. 資格取得を考えた時期 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
大学入学後	38.7	50.1	48.9	62.7
高校生の頃	46.0	36.5	33.0	24.3
小中学生の頃	8.0	11.5	16.0	11.8

(4) 図書館に関わる利用経験

図書館等の利用経験について、①公共図書館の利用, ②小・中・高の学校図書館の利用, ③大学図書館の利用, ④近くの地域文庫の利用, ⑤小・中・高での読み聞かせの時間, ⑥図書委員としての活動, ⑦図書館での体験学習, ⑧図書館ボランティアの活動の経験について、それぞれの選択肢の数値(0=ない, 1=あまりない, 2=たまに, 3=よく)を平均化して、LIPER 調査(司書希望)と比較したものが図1である。



その結果、本調査では小・中・高で読み聞かせ経験のある学生が多く、平均値は1.7であった。LIPER 調査(司書希望)の平均値は0.93となり、マン・ホイットニーのU検定の結果、1%水準で有意差が認められた*4)。この読み聞かせ経験については、英和調査においても平均値が1.39と高い傾向にあった(明治調査の平均値は0.94)。

その他、LIPER 調査(司書希望)との差が見られた項目として、公共図書館と大学図書館の利用経験がある。公共図書館の利用経験は、本調査の平均値が1.98, LIPER 調査(司書希望)は2.33であり、利用経験が若干少ない傾向にあることがわかる。同様に、大学図書館の利用経験について

は、本調査の平均値が1.24、LIPER 調査（司書希望）では2.02であり、大きな差がみられた。本調査の回答者に1 - 2年生の割合が高いことも影響されているが、大学図書館の利用経験が極めて低いことがわかる。

(5) 本に対する嗜好

本に対する嗜好についての設問では、本調査では「とても好き」、「やや好き」を合わせ、91.9%と高い割合を示した。LIPER 調査でも同様に93.2%の高い割合を示している。なお、本調査で「あまり好きではない」、「全く好きではない」と回答した割合は8.8%、LIPER 調査では6.8%であった。

(6) 経験・嗜好の影響

先述した(4)の図書館に関わる利用経験や、(5)の本に対する嗜好が、司書資格取得への意欲や態度に影響があるかという設問に対して、本調査では「とても思う」「やや思う」を合わせ89.8%を占めた。同様に、LIPER 調査においても高い割合を示しているように(81.2%)、本設問において、これまでの図書館の利用経験や本への嗜好の影響を受けて、司書資格取得を考えていることがわかる。

(7) 図書館についての認識

「図書館」と聞いて思い浮かべる図書館について、上位3項目は表4の通りである。LIPER 調査（司書希望）等と比較すると、公共図書館の割合が最も高い点は同じであるが、「かつて通っていた中学や高校の図書館」の割合がやや高く、大学図書館の割合は極めて低いことがわかる。

表4. 思い浮かべる図書館 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
公共図書館	73.7	75.3	63.5	69.1
大学図書館	8.8	11.0	18.3	20.6
中高の図書館	17.5	10.1	14.4	4.6

他方、「図書館はどういう場所であると考えているか」という設問について、上位4項目は表5

の通りである。これらによると、本調査では「本を借りるところ」が他の調査と比較して割合が高くなり、「様々な情報を入手するところ」については割合が低くなっていることがわかる。なお、本調査で「本を借りるところ」と回答した学生を抽出し、「図書館」と聞いて思い浮かべる図書館を調べたところ、81.3%が公共図書館と回答していた。

さらに、LIPER 調査・英和調査では男女別に集計され、「調べものをするところ」と回答した男子学生の割合が女子学生よりも高い傾向を示していた（男子学生：LIPER 調査21.9%、英和調査20.0%、女子学生：LIPER 調査12.0%、英和調査10.0%）。本調査では、これら女子学生の数値と比較すると、「調べものをするところ」の割合はやや高いことがわかる。

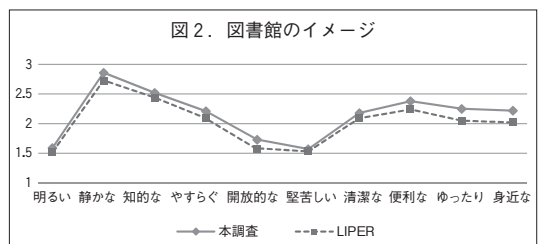
表5. 図書館の場所 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
本を借りる	58.4	45.4	50.0	44.6
情報を入手	19.0	27.6	20.2	22.9
調べもの	13.1	14.0	10.6	22.9
本を読むところ	8.0	8.9	11.5	6.9

(8) 図書館に対するイメージ

図書館に対するイメージについては、10種類の形容詞が当てはまるかどうかを尋ねた。選択肢の数値（0 = 全く思わない、1 = あまり思わない、2 = やや思う、3 = とても思う）を平均化し、LIPER 調査全体と比較したところ（図2）、大きな違いはみられなかった。

図2をみると、本調査では、「静かな」(2.86)、「知的な」(2.52)、「便利な」(2.38)が上位を占めた。LIPER 調査全体や英和調査においても同様の傾向であった。



(9) 図書館員の認識

「図書館員」と聞いて思い浮かべる人について、LIPER 調査全体等とを比較したところ、上位3項目が表6のようになった。これによると、他の調査と同様に「近くの公共図書館員」が最も高い割合であったが、本調査において「大学図書館員」の割合が極めて低く、「学校図書館員」の割合が高い傾向を示している。これは、(4)において先述した図書館の利用経験が影響していると推測できる。本設問で「学校図書館員」と回答した学生について、先の(4)における学校図書館の利用経験を抽出したところ、平均値が2.38(本調査平均値：2.26)となった。

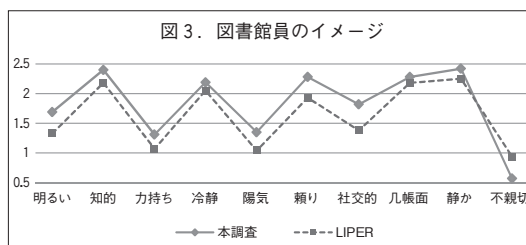
表6. 図書館員の認識 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
公共図書館員	59.9	62.7	47.1	60.0
学校図書館員	29.9	18.3	21.2	13.1
大学図書館員	6.6	15.7	24.0	24.6

(10) 図書館員へのイメージ

図書館員に対するイメージについて、10種類の形容詞が合致するかどうかを尋ねた。先述した(8)と同様に点数の平均値を求め、LIPER 調査全体と比較した(図3)。その結果、本調査では、「静かな」(2.42)、「知的な」(2.4)、「几帳面な」(2.28)、「頼りになる」(2.28)が上位を占めた。他方、LIPER 調査全体でも、「静かな」(2.24)、「几帳面な」(2.18)、「知的な」(2.17)が上位を占め、ほぼ同様の傾向を示した。しかし、「頼りになる」についてLIPER 調査全体では平均値1.93で5番目であり、若干の差異がみられた。

なお、LIPER 調査全体よりも、本調査で平均値が高かった項目として「明るい」(0.37)、「陽気な」(0.32)、「頼りになる」(0.36)、「社交的な」(0.44)があげられる。このように、LIPER 調査と比較すると、図書館員に対して明るく外向的で、頼りになる肯定的な存在と考えていることがわかる。



(11) どのような知識が得られるか

十文字司書課程の科目を履修することにより、どのような知識を得られるかをLIPER 調査全体等と比較したところ、上位5項目を表7のように整理できた。これによると、「図書館のサービス」、「図書館の管理運営」、「本の分類や整理」についてLIPER 調査全体等と同様に本調査においても上位を占めた。

しかしながら、「情報検索の方法」については、本調査の割合が極めて低いことがわかる。こうした「情報検索の方法」を選択した学生を抽出し、先述の(4)図書館に関わる利用経験や、(7)図書館についての認識等の設問別に分析したところ、大きな差は見られず、本調査全体の傾向として割合が低いといえる。

表7. 司書課程で得られる知識 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
図書館サービス	86.9	80.2	68.3	83.4
図書館の管理運営	78.8	64.1	48.1	65.1
本の分類・整理	71.5	66.7	53.8	72.0
情報メディア	24.8	26.2	不明	19.4
情報検索の方法	11.7	36.9	不明	37.7

(12) 将来の職業との関連

司書資格を取得することと将来の職業との関連についてLIPER 調査全体等とを比較したものが表8である。これによると、他の調査と比較して、本調査では「資格を生かして図書館で働きたい」といった図書館への就職を前向きに考えている割合は少なく、むしろ「司書資格取得が就職に有利になればどのような仕事でもよい」と消極的に考えている割合が高いことがわかる。先に述べた

(1) 資格取得への意欲はやや高い傾向にある一方で、将来の職業との関連で消極的に考える傾向にあることは大きな課題である。

表 8. 将来の職業 (%)

	本調査	LIPER	英和	明治
資格を生かして図書館で働きたい	19.7	32.3	32.7	25.7
図書館でなくとも学びを生かせる職場	37.2	37.6	38.5	46.3
資格取得が就職に有利になればよい	28.5	10.2	不明	7.4

4.3 分析

これらの調査結果から、今後の十文字司書課程のビジョンと教育プログラム再構築へ向けた課題を明らかにするため、下記の観点でデータを抽出し分析した。

第一に、司書資格取得について特に積極的な学生である。既に LIPER 調査¹⁰⁾ や英和調査¹¹⁾ においても、同様の学生を抽出しその傾向を明らかにしており、本調査でも特徴を比較できる。

第二に、LIPER 調査との差がみられた司書資格取得を考えた時期である。高校生の頃から司書資格取得と考えていた学生と、大学入学後に考えた学生とを抽出し、その特徴や傾向を明らかにした。

第三に、司書資格取得と将来の職業との関連である。これについても、LIPER 調査との差がみられた設問であり、司書資格取得が、学生の将来の目標や方向性とどのように関連しているのかをみることは重要といえる。

(1) 資格取得に特に積極的な学生

他の調査と同様に、下記の①から④の条件に合致する学生を「資格取得に特に積極的な学生」としてデータを抽出した。

- ①司書資格取得を希望している学生
- ②他の科目を犠牲にしても資格科目を履修する学生^{*5)}
- ③図書館で働きたいという理由で資格取得を希望している学生
- ④将来の職業についても、資格を生かして図書

館で働きたいとする学生

その結果、本調査で該当する回答者は8名(0.6%)であった。同様の学生について、LIPER 調査(資格課程)では10.5%、英和調査では12.8%であり、いずれの調査でも女子学生の割合が高かった。この8名の特徴を本調査全体の結果と比較したところ、表9のように整理することができる。

表 9. 資格取得に特に積極的な学生の比較

	本調査	LIPER	英和
学年	2年生	1年生	3年生
性別	女子学生	女子学生	女子学生
図書館利用経験	よく利用する	よく利用する	よく利用する
図書館活動経験	多い	多い	少ない
図書館の認識	大学・学校図書館を連想する回答者の比率が低い	大学の図書館を連想する回答者の比率が低い	大学・学校の図書館を連想する回答者の比率が低い
図書館のイメージ	肯定的(明るく、清潔な、便利な、堅苦しくない)	肯定的(明るく、開放的、堅苦しくない)	肯定的、癒しの空間(やすく、便利な、身近な)
図書館員の認識	大学図書館員を連想する回答者の比率が低く、学校図書館員の比率が高い	大学図書館員を連想する回答者の比率が比較的低い	大学・学校図書館員を連想する回答者の比率が低い
図書館員へのイメージ	肯定的、知的、外向的(明るい、知的な、冷静な、陽気な、頼りになる)	肯定的(明るい、陽気な、社交的)	肯定的、頼りがいがある(力持ち、陽気な、頼りになる)

*英和調査の表2を引用し、本調査を追記した。

具体的には、2年生で、学校図書館の利用(平均値2.71)をはじめ、公共・大学図書館の利用経験が高く、図書委員の経験(平均値2.13)等の図書館の活動経験も高かった。また、図書館に対しては、明るい・清潔・便利が、図書館員へは明るい・知的・陽気・頼りになるといったイメージを持つ割合が高かった。

LIPER 調査や英和調査と比較すると、図書館については身近で親しみのある公共図書館を、図書館員については、知的・冷静で、かつ明るく陽気でもある学校図書館員のイメージを持っていることがわかる。

(2) 高校生から資格取得を考えていた学生

本調査において、先述したように、高校生から司書資格取得を考えていた学生は46%であり、LIPER 調査等と比較して割合が高かった。こう

した学生を抽出して分析したところ、図書館の利用経験については、公共図書館の利用（2.04：本調査1.98）、学校図書館の利用（2.38：本調査2.26）、図書委員の経験（1.83：本調査1.54）となり、本調査全体と比較して、公共図書館や学校図書館の利用経験が高く、さらには図書委員の経験も高いことがわかった。さらに、司書資格取得の理由を整理すると、表10の結果になった。

表10. 司書資格取得理由：時期別（％）

	高校生から	大学入学後	本調査	LIPER
図書館で働きたい	25.4	3.8	16.1	22.4
何が資格を得たい	23.8	37.7	25.5	25.4
図書館が好き	31.7	15.1	24.8	20.1

これによると、高校生から司書資格取得を考えた学生は、「図書館で働きたいから」、「図書館が好きだから」といった割合が高く、司書資格取得に対して肯定的に捉えていることがわかる。他方で、大学入学後に資格取得を考えた学生は、「何でもいいから資格の一つくらいは取ろうと思ったから」という割合が高く、資格取得自体が目的になっている傾向にあった。同じように、図書館はどのような場所かという設問を分析すると、表11のようになった。

表11. 図書館の場所：時期別（％）

	高校生から	大学入学後	本調査	LIPER
本を借りる	58.7	49.1	58.4	45.5
情報を入手	25.4	12.7	19.0	27.6
調べもの	7.9	17.5	13.1	14.0

すなわち、高校生から司書資格取得を考えた学生は、「本を借りるところ」の割合が最も多いものの、「様々な情報を入手するところ」と考える割合も高いことがわかる。しかしながら、大学入学後に司書資格を考えた学生は、「調べ物をするところ」の割合が高くなっている。

さらに、司書資格を取得することと将来の職業との関連について抽出したものが表12である。これによると、高校生から司書資格取得を考えた学生は、肯定的、前向きな傾向にある一方で、大学入学後に資格取得を考えた学生は、「資格取得が就職に有利になればよい」と、司書資格と将来の

職業との関連を消極的に考える傾向にあった。

表12. 将来の職業：時期別（％）

	高校生から	大学入学後	本調査	LIPER
資格を生かして図書館で働きたい	27.0	6.3	19.7	32.3
図書館でなくとも学びを生かせる職場	47.6	20.6	37.2	37.6
資格取得が就職に有利になればよい	15.9	42.9	28.5	10.2

（3）就職に有利になればよいという学生

本調査では、司書資格を取得することと将来の職業との関連について、「図書館で働きたい」という割合がLIPER調査等と比較して低く、「司書資格取得が就職に有利になればどのような仕事でもよい」と考えている割合が高かった。そこで、これらのデータを抽出し特徴を分析した。

表13は、司書資格取得の理由別に整理したものである。これによると、司書資格取得に関連して将来の職業を前向きに考えている学生は、「図書館で働きたいから」、「図書館が好きだから」というように、資格取得の理由も前向きであることがわかる。他方で、「資格取得が就職に有利になればよい」という学生は、資格取得理由が消極的な傾向にあることがわかる。

表13. 司書資格取得理由：将来の職業別（％）

	資格を生かして図書館で働きたい	図書館でなくとも学びを生かせる職場	資格取得が就職に有利になればよい	本調査	LIPER
図書館で働きたい	44.4	17.6	5.1	16.1	22.4
何が資格を得たい	11.1	27.5	35.9	25.5	25.4
図書館が好き	37.0	25.5	10.3	24.8	20.1

こうした「資格取得が就職に有利になればよい」という学生は、公共図書館や学校図書館の利用、さらには図書委員の経験が低いことがわかる（表14）。さらに、図書館に対するイメージとして、「堅苦しい」（平均値：1.82、本調査：1.57）、「ゆったりとした」（平均値：2.08、本調査：2.25）、「身近な」（平均値：1.97、本調査：2.22）となり、図書館に対するイメージについても、やや堅苦しい等の消極的なイメージを持っていた。その一方で、

「資格を生かして図書館で働きたい」という学生は、図書館利用経験が総じて高く、特に学校図書館の利用と図書委員としての活動の数値が本調査結果と比較して高いことがわかる。

表14. 図書館等の利用経験：将来の職業別（平均値）

	資格を生かして図書館で働きたい	図書館でなくとも学びを生かせる職場	資格取得が就職に有利になればよい	本調査	LIPER
公共図書館の利用	2.19	2.14	1.62	1.98	2.33
学校図書館の利用	2.48	2.39	2.03	2.26	2.28
大学図書館の利用	1.15	1.20	1.26	1.24	2.02
読み聞かせの経験	1.74	1.74	1.84	1.7	0.93
図書委員の経験	1.85	1.57	1.16	1.54	1.51

(4) 考察

このように、司書資格取得を考えた時期、そして司書資格取得と将来の職業との関係について、資格取得への意欲や図書館利用経験など、大きく両極に分かれることがわかった。すなわち、高校と大学の連続性、そして将来の職業に対する意識について、図書館という領域で今後どのように考え、何を実践するのが問われているといえる。

既に高校生から司書資格を考えていた学生や、図書館への就職に意欲を持つ学生には、図書館への正規司書としての就職が難しい状況を鑑み、図書館に関する興味や関心を生かしながら、職業の多様性を知り、就業の選択の幅を柔軟に広げていくことが重要である¹⁶⁾。

その一方で、大学入学時に司書資格取得を考えた学生や、「資格取得が就職に有利になればよい」という学生については、これまでの図書館経験や印象に縛られることなく、図書館の存在意義やその魅力をはじめ、図書館司書資格を取得する意義などを十文字司書課程を履修する間に伝えなければならない。

しかし、こうした学生は、資格があれば少しでも就職に有利になるのではないかという就職への不安により、「資格」という明らかな形になった

ものへ頼り、模索の不安を一旦早期に解消しようという気持ちが司書資格取得へ働いたといえる¹⁷⁾。資格が職業世界をそのまま映し出しているわけではないが、現場の実学的要素が強い図書館情報学の特質を生かし、職業どうしのつながりをはじめ、「仕事をするを通して働く者がどのように世の中とつながり、社会に参加することになるのか、それらを含めた苦労や充足感と、誇りとはどのようなものなのか¹⁸⁾」ということについて、気づき・発見するための場をつくることが一層必要であるといえる。

5. ビジョン・教育方法再構築への方向性

本調査結果の傾向を踏まえ、十文字司書課程のビジョンと教育プログラムの再構築へ向けた方向性を明らかにした。

第一に、本調査では司書資格取得の意欲はあるものの、将来の職業との関連について明確な目標や展望がない学生群が存在する傾向にあった。本学の場合、社会情報学系の学生がそのような傾向にあり、在学中に職業や将来の方向性を考える学生が多い¹⁹⁾。十文字司書課程でも、単に図書館に関する理論、知識、技術にとどまらず、本が好きな学生の興味・関心を踏まえながら、図書館を取り巻く職業の具体像や女性のキャリア・パスを柔軟に考えるプログラムを構築しなければならない。特に、図書館という現場の学問から職業の多様性を知り、女性が働く仕事のリアリティーを早期²⁰⁾に見つめることができる取り組みが必要である。

そのための具体的な実践例の一つとして、十文字司書課程における2012年集中講義の「図書館基礎特論」（選択科目）における試行的な取り組みがある。すなわち、現役図書館員1名（本学短大卒業生）と企業に勤務し司書や学芸員の資格を持つ30歳代の女性2名（出版社、環境デザイン会社）にご登壇いただき、結婚・出産を踏まえながら、これまでに経験した仕事や将来の目標、そのため

に意識して取り組んでいることなどをお話いただいた。これにより学生は、1-2年後の目の前の目標ではなく、将来に向かっての展望やありたい姿、そして目標に向かうモチベーションの重要性に気づき、自分自身を見つめ直す場になったといえる。こうした取り組みを持続的に展開し、より豊かな実践を創るためには、本学のキャリア教育との連携とともに、生涯にわたる女性のキャリア形成支援²¹⁾への視座と身近に感じる女性のロールモデル²²⁾への出会いが欠かせないといえる。

第二に、大学入学前の高校生の頃から司書資格取得を考えている学生は、資格取得の意欲も高く、将来の職業との関連も肯定的に考える傾向にあった。既に在学している学生に対しては、先述した通り就業の選択の幅を柔軟に広げていく必要がある一方で、豊かな図書館現場の実践と学生のこれまでの図書館の利用経験が今後の図書館界の人材確保に影響を及ぼすとすれば¹⁰⁾、十文字司書課程が地域の公共図書館・学校図書館との連携や高大接続を図ることは重要である。

既に、学校図書館を活用し、自ら問いをつくり考える探究学習の実践や、初年次教育のみならず入学前教育として図書館が実施するプログラムが行なわれている事例がある。例えば十文字司書課程においても、情報を評価し収集し活用するという情報リテラシーに係る教育実践を埼玉県内高等学校の学校司書と連携することや、公共図書館をはじめ社会教育機関における情報リテラシー教育実践に対する支援などが考えられる。図書館実習の開講を視野に入れ、単に大学図書館の地域開放に留まらない地域とのつながりや、埼玉県内の図書館関係団体との連携が求められよう。

第三に、大学図書館への印象が極めて低く、他方で学校図書館への印象、読み聞かせの経験が高い傾向にあった。館種を問わず、図書館の利用経験が図書館全般の印象や司書資格取得への意欲に影響があると考えられるため、本学図書館の条件整備は急務である。とりわけ、大学入学後に司書

資格の取得を考えた学生にとって、実際に身近に利用する図書館への印象は、そのまま学びへの意欲に反映されよう。

近年、図書館の設置をはじめ図書館サービスが商品化、市場化される環境下において、自治体等の図書館政策形成の貧困化が指摘され、公共空間として図書館空間の再構築が求められている²³⁾。既存の図書館サービスに沿って考えるのではなく、図書館を創り発見するという参加と協働による「図書館づくり」を念頭に、学生が参画する仕組みをつくる必要がある。そのためにも、ライブラリーサポーターによる選書ツアーなどのさらなる展開や、文献検索セミナーの実施、POPの制作をはじめ授業内で本学図書館の具体的な改善や提案につながる実践を行なわなければならない。十文字司書課程では、本学図書館が「場」となり、学生が自ら問題を発見し、柔軟に考え、対話を繰り返しながら解決する力を養う仕組みづくりが求められている。

第四に、圖書の貸出や図書館サービス、図書館運営など、図書館に対してやや固定的に認識し、さまざまな情報を検索し入手するという観点が低い傾向にあった。図書館とは様々な情報を入手できる社会的装置であり、一般的に司書課程では、レファレンスサービスに的確に応じるための情報検索の知識や技術を習得しなければならない。特に、図書館という場所について、「調べものをするところ」と回答する女子学生の割合が低い傾向にあった。近年は、情報通信技術を活用したさまざまな図書館サービスが展開されている。図書館サービスの裾野を広げ、未来の図書館サービスを拓くためにも、本学のドメインを生かした学問横断的な内容で図書館を見つめ直した教育プログラムの構築が必要である。

例えばこのような観点から、図書館のサービス特論の一環として、図書館の障がい者サービスや高齢者サービス、乳幼児サービス、多文化サービス、ICTを活用したサービス等について本学の

各学問分野からの視座により、図書館サービスの可能性を新たに見出せるプログラムをつくることができよう。そして、これは学部学生のみならず現職の図書館員をも対象にすることができる。学生が所属する学科での主題専門知識を生かしながら、魅力的な教育プログラムを創るためには、司書課程のみで全てを完結することはできない。他の学科や個々の教員との密な連携を図る必要がある。

6. おわりに

社会で働き、生きていくために、司書の資格取得とは何を意味するのであろうか。女子学生ひとりひとりの人生の中で、司書資格取得とはどのような位置を有するのであろうか。司書課程の履修や司書資格の取得は目的ではなく、「筏下り」²⁴⁾のプロセスのひとつであるといえる。本調査結果をはじめ、建学の精神や大学のディプロマポリシーを踏まえ、十文字司書課程のビジョンを明確にし、今後の教育プログラムの再構築につなげたい。

注

- *1) LIPER 調査の報告・データを用いた。<<http://www.jslis.jp/liper/report06/report.htm>>
- *2) 例えば、日本図書館協会による認定司書、日本医学図書館協会によるヘルスサイエンス情報専門員、大学図書館支援機構による認定試験などがある。
- *3) 本調査では、司書教諭資格希望者も存在したが(3名)、極めて少数であり、司書の資格取得を第一に考えているため、本調査の分析にそのまま含めている。
- *4) 英和調査と同様にグラフの作図、同様の箇所での検定を行った。
- *5) ②の要件は、英和調査による視点。

参考文献

- 1) これからの図書館の在り方検討協力者会議『司書

- 資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について(報告)』2009, 72p.
- 2) 平井歩実, 二村健「図書館法改正: その意味と問題点: 司書課程リニューアルにおける新戦略」『明星大学研究紀要: 人文学部』45, 2009, p.53-78.
- 3) 松本直樹「大妻女子大学司書課程履修者の資格取得に関する研究」『大学図書館研究』94, 2012, p.49-57.
- 4) 田窪直規「今後の大学における司書養成とその科目構成について: 各司書課程の独自のコンセプト・戦略による, 多様な司書養成教育の必要性」『図書館雑誌』103 (4), 2009, p.220-222.
- 5) 川原亜希世「近畿大学司書課程の現状」『近畿大学短大論集』38 (1), 2005, p.55-64.
- 6) 二村健「明星大学の新しい司書課程」『現代の図書館』49 (3), 2011, p.192-195.
- 7) 青柳英治「明治大学司書課程における司書養成の取り組み」『現代の図書館』49 (3), 2011, p.196-200.
- 8) 安形輝「亜細亜大学における改正司書養成科目への対応」『現代の図書館』49 (4), 2011, p.232-235.
- 9) 糸賀雅児「雇用多様化の時代における図書館専門職の養成」『図書館雑誌』101 (11), 2007, p.737-740.
- 10) 竹内比呂也ほか「司書・司書教諭取得希望学生の意識についての調査」『2005年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱』2005, p.43-46.
- 11) 青柳英治「司書資格取得希望者の意識に関する研究: 山梨英和大学を事例として」『日本生涯教育学会論集』30, 2009, p.3-12.
- 12) 辻慶太ほか「司書資格取得者に対する追跡調査: 仕事・満足度を中心として」『図書館界』60 (3), 2008, p.166-179.
- 13) 野口武悟「大学新入生の図書館利用経験と意識を探る: S大学J学科の新入生を対象としたアンケート調査から」『図書館総合研究』10, 2010, p.41-54.
- 14) 溝上慎一「青年期の自己形成から見たキャリア発達, 社会的自立」『発達』33 (129), 2012, p.11-17.

- 15) 阪田蓉子「LIPER：図書館情報学教育班による初学者調査に司書課程受講生が協力」『司書・司書教諭課程年報』5, 2005, p.18-26.
- 16) 角方正幸ほか『就業力育成論：実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版, 2010, 151p.
- 17) 宮田安彦「大学生のキャリア学習支援にあたって：大学生の資格志向を踏まえて」『社会教育』59(4), 2004, p.46-48.
- 18) 宮田安彦「大学生のキャリア学習支援にあたって：大学生の資格志向を踏まえて（その3）」『社会教育』59(6), 2004, p.46-49.
- 19) 亀田温子「大学初年次における女子学生のキャリア意識：初年次教育・キャリア教育検討に向けて」『社会情報論叢』15, 2012, p.205-227.
- 20) 濱名篤「新入生の適応と不適応はどのような経験から生まれるか：学習面と対人関係を中心に」『大学教育学会誌』27(1), 2005, p.31-36.
- 21) 日本女性学習財団『女性のキャリア形成支援ハンドブック：講座企画・運営・評価のポイント』2011, 79p.
- 22) 国立女性教育会館『夢をかたちにした女性たち：将来のキャリアを考えたいあなたへ』2007, 142p. (ヌエック・ブックレット, 5)
- 23) 山口源治郎「図書館空間の市場化と知る権利保障：地域住民とともに共同空間をつくる」『月刊社会教育』676, 2012, p.4-10.
- 24) 大久保幸夫『キャリアデザイン入門 [I]』日本経済新聞社, 2006, 168p.